

高崎経済大学地域科学研究所 ニュースレター No. 21

目次	所長挨拶	(1)
	事業報告① 第8回連携公開講座報告	(1)
	事業報告② 第15回地元学講座	(3)
	事業報告③ 第19回公開講演会	(4)
	研究プロジェクト進捗報告	(5)
	地域科学研究所動静	(11)
	編集後記	(11)

所長挨拶

本ニュースレターには、高崎経済大学地域科学研究所の事業のうち、第8回連携公開講座、第15回地元学講座、第19回公開講演会、および研究プロジェクトの進捗状況についての概要報告等を掲載いたしました。是非、ご一読ください。

新型コロナウイルス感染症の5類への移行により、少しずつではありますが、社会が平静を取り戻しつつあります。当研究所の各種事業もコロナ禍の定員制限を撤廃し、ようやく以前のように活気が戻りつつあります。

市民の皆さまには、今後とも、当地域科学研究所の事業に積極的にご参加いただくとともに、より一層のご理解とご協力を引き続きお願いする次第です。

所長 佐藤 徹

事業報告① 第8回連携公開講座報告

今年は、5月20日から6月17日にわたり、高崎市中央公民館にて、連携公開講座が開催されました。新型コロナウイルス感染症の影響による定員の制限を従来通りとなる100名に戻しての実施となりました。大変ありがたいことに多くの参加申し込みをいただき開催することができました。

開催講座のテーマおよび講師は次の通りです。

◎第1回：5月20日（土）開催
「日本語の性質」
講師：高松 正毅 所員（経済学部教授）

◎第2回：5月27日（土）開催
「差別の哲学」
講師：天野 恵美理 特定研究員
(地域政策学部特命助教)

◎第3回：6月3日（土）開催
「身近な生活環境を
ユニバーサルデザインから考える」
講師：長野 博一 所員（地域政策学部准教授）

◎第4回：6月10日（土）開催
「近代教育展開と地域社会
一日中の比較史から考える」
講師：蔡 珂 特定研究員
(地域政策学部特命助教)

◎第5回：6月17日（土）開催
「年金と環境問題」
講師：水口 剛 学長

◎第1回：5月20日（土）開催

「日本語の性質」

講師：高松 正毅 所員（経済学部教授）

人は言語とともにあり、言語とともに生きています。そして、日本語で考える日本人は、母語である日本語と日本文化に根ざして外部世界を把握します。

言語には、人類に共通する普遍的な部分と各民族の文化や伝統、風土や風俗、風習やしきたりに根ざした個別的な部分があります。

言語が普遍的であるからこそ、我々は民族や宗教の壁を超えて分かり合えます。一方、各言語が個別的な部分を持つことによって、ものの見方や考え方が異なってきます。ある特定の言語を用いることにより、当人の好むと好まざるとにかかわらず、ある特定の方向に意識が向けられることにもなります（「サピア・ウォーフの仮説」）。

ところで、語彙発達的一般的な特徴として、生活に密着し、かつ文化に深く根ざし、意識が向く先の語彙が多くなります。

このときの語彙発達の仕方に注意してください。「語彙が多い」とは、ある分野の語彙が互いに関係なく発達していることです。たとえば「雨」なら、「〇〇雨（あめ・ウ）」ではなく、「さみだれ」「夕立」など、まったく別の言い方が多い場合に「語彙が多い」と考えます。

実は、英語には野生（wild）の牛を含んだ「牛」の総称は存在しません。Cowboyと言うので、cowが牛だと思われがちですが、cowはあくまで、牛乳をとったり肉を食べたりするための家畜の雌牛です。他に、雄を含んだ家畜の牛（総称）はcattle、雄牛はbull、去勢された牛はbullock、子牛はcalf、去勢された食肉用の牛はox、去勢された食肉用の子牛はsteerで、牛肉はbeef、子牛肉はvealです。

それに対し、日本語には「牛」があるのですが、それ以上詳しく言いたいときには、「牛（うし・ギユウ）」に他の語を付け（有標化（marked）し）

て表します。つまり、「牛」があるというより「牛」しかないという方が正しいのです。

日本語の語彙が増える原因としては、固有語（和語）に加え借用語（漢語・外来語）が重層的に存在することがあげられます。たとえば、厠、はばかり、お手洗い、手水場、便所、ご不浄、雪隠、トイレ、などです。また、忌み言葉や雅語（歌語）など、古からの文化に根ざす別の言い方があること、敬語が発達していることなどもあります。



＜講義の様子 講師：高松 正毅 所員＞

また、日本語にはオノマトペ（擬音語・擬態語）も豊富です。オノマトペは、語音と意味とが直接的に結び付いており、理性よりも感情に訴えます。オノマトペは他の言語で言おうとすると、適切な表現への置き換えや逐語訳、直訳はできず、説明的にならざるを得ない場合がほとんどです。

オノマトペで考える、オノマトペで述べるということは、主体や対象を全体的・感覚的に一気に捉えるということです。これは、ヨーロッパの言語に見られる主体や対象をバラバラに分解して分析的・構造的に捉えるのとは極めて対照的です。したがって、日本語で発想しながら、外国語、たとえば英語を話すことはできません。

オノマトペを多用する日本人は、外部世界を全体的にとらえるのに優れています。よって、外部世界を分析的にとらえることも努めて意識すべきでしょう。これには、英語をはじめとする外国語の修得が役に立ちます。

日本語ばかりでなく外国語の語彙力・言語力を鍛え、全体的と分析的の二つの認識力を高めることで、日本人は虎に翼の思考力が身につけられると考えます。

高松 正毅（経済学部教授）

事業報告② 第15回地元学講座

「地域文化論」という講義を担当して6年目になる。群馬生まれ群馬育ちでありながら、大学進学から十数年、群馬を離れていた私にとっては、毎年度、講義をするごとに（レジュメを作成するごとに）新たな気づきがある。

群馬は小麦中心の粉食文化であることは知っていても、それはつまり稲作に不向きであったことの裏返しでもある、というのはこの講義を受け持つまで気づけなかった（もっとも、現在では稲作もそれなりに行われているのだが）。

一昨年、関西にいる知人とやり取りしていたとき、群馬の地酒で旨い銘柄があるという話になった。私も知っていた銘柄なので、嬉しくもあったのだが、同時に素朴な疑問がわいてきた。日本酒というのは米と水と麴が決め手だという。先にも記したように「米どころ」とは決して言えないこの群馬県で、なぜ品質の高い日本酒が製造できるのだろうか。群馬の地酒とはいったいどのようなものなのだろうか。ひいては、群馬の食文化として地酒／日本酒を考えてみたら、新たな一面を切り拓くことができるのではないか。

2023年7月20日（木）16時より図書館ホールにて行った地元学講座は、こうした食文化としての群馬の地酒を再認識する、その第一歩としてまさに相応しい内容だった。講師として今回お招きしたのは、群馬 SAKE TSUGU 代表の清水大輔氏である。

講座はまず、清水氏の自己紹介から始まった。群馬県前橋市生まれの清水氏は、一橋大学大学院修士課程修了後に群馬県庁へと入庁され、県内のさまざまな産業の振興および支援に携わってお

られたという。そうしたなかで出会ったのが群馬の地酒であり、その旨さ、奥深さに衝撃を受け、仕事外でも地酒振興に取り組まれるようになり、ついに2019年3月に県庁を退庁、群馬の地酒振興を目的とした群馬 SAKE TSUGU を同年10月1日（日本酒の日）に開業したという。

「日本酒というと、大学生のときに無理やり飲まされて二日酔いする酒というイメージ」だった清水氏が、県庁職員を辞してまでその振興に注力するようになったのはなぜか。講座では群馬の地酒のポイントを的確かつ丁寧に教えてくださった。私なりにまとめれば、それは豊富な水資源をもとに、蔵元による研究と研鑽によって築き上げられたものに他ならない。約7割が「水」でできているという日本酒。利根川・烏川・渡良瀬川など、水資源が豊富な群馬では必然的にそれを活かした産業や食文化が生まれ、そうしたなかに日本酒もうまれたと考えられよう。また先に「米どころ」ではないと記したが、日本酒の原料となる「酒米」は確かに新潟や兵庫から取り寄せて造られることが多いという。しかし、近年では群馬県産の酒米「舞風」を用いた（さらに酵母も群馬で生み出された「群馬 KAZE 酵母」を用いた）オール群馬県産の地酒「舞風」も造られるようになり、群馬の地酒は着実に進歩していることがよくわかった。



<講演の様子 講師：清水 大輔 氏>

もちろん、若者に限らない消費者全体の「日本酒離れ（アルコール離れ）」やそれに伴う酒蔵の

廃業といったシビアな現実についてもお話があった。ただ、各蔵元はそうした現実を正面から直視したうえで、対策を練っていることも今回の講座で理解が深まったところでもある。あとはそうした生産者側の取り組みを消費者がどう知ることが問題であろう。群馬 SAKE TUSGU はまさにそうした生産者と消費者とを取り持つ事業を展開しており、今後注目したい。と同時に、私自身は再三書いてきたように、地域文化としての地酒／日本酒という観点を多くの人と共有しながら、その位置づけを検討したい——改めてそうした思いを強くする講座であった。

鈴木 耕太郎（地域政策学部准教授）

事業報告③ 第19回公開講演会

2023年7月21日（金）に開催された第19回公開講演会では、多摩大学大学院経営情報学研究科教授であり100年企業戦略研究所所長の堀内勉氏をお招きし、「知の創造と読書」と題して講演いただきました。当日は、定員50名を上回る参加者にお越しいただき、密度の濃い講演内容に、会場も高い集中力で臨み、質疑応答も大変に盛り上がりました。



<講演の様子 講師：堀内 勉 氏>

堀内氏は、いわゆる超エリート街道を歩んでこられた方です。東京の進学校御三家の一角である麻布高校から東京大学法学部に進まれ、日本興業銀行に就職し、企業派遣で米国ハーバード大学のロースクール（法科大学院）に留学、その後、ゴ

ールドマンサックス証券に転じ、大手不動産開発企業である森ビルの財務担当役員（CFO）を務められました。ご経歴だけ見ると、順風満帆な人生であるように思われます。しかし、堀内氏は、銀行員時代、総合企画部という銀行の経営の中枢を担う部署にしながら、日本の金融危機と大蔵省接待汚職事件を経験することになります（1997～1998年）。当時、山一証券や日本長期信用銀行が破綻し、結果として現在のメガバンクの誕生という金融再編につながるのですが、金融業界では多くの逮捕者や自殺者が出るなど、異常な状況でした。日本を代表する民間金融機関であった日本興業銀行も単体では存続が難しくなり、他行と合併し、みずほファイナンシャルグループとなりました。その後、リーマンショックが起こり（2008年）、堀内氏は森ビルのCFOという立場で金融業界の荒波を再び経験され、大企業の資金繰りの責任者として大変なご苦勞をなさいました。超エリートであるはずの堀内氏が、これら一連のキャリア上の困難に遭遇し、ご自身も精神的に非常に辛い日々を送る中、あらためて「読書」と向き合い、それによって自分は「生かされた」と述べておられます。人生において、大きな挫折に度々遭遇し、自身の生きる方向性を完全に失った状態となり、その時に、ある意味で自分の存在をかけて、「溺れる者は藁（わら）をも掴む」という切羽詰まった状況で、必死に読書をしたそうです。堀内氏は、一連の読書体験から、「人間はいかに生きるべきか」という問いに対して、彼なりの方向性を見出すに至ります。本によって生かされた経験から、「読書の意味を広く世の中に伝えたい」という思いで、堀内氏は『読書大全』という著作を世に送り出しました（2021年、日経BP）。「宗教と神話」「哲学と思想」「経済と資本主義」という流れで「人類の知の進化」を解説し、200冊に及ぶ様々な分野の本を紹介する内容で、488ページに及ぶ大作です。

堀内氏は、「読書の意味」について「著者との

対話」と「内省＝自分との対話」を繰り返すことだと述べています。「あなたにとっての『どんなことが起こっても、これだけは本当だと思ふこと』とは何ですか?」という問いかけを堀内氏は講演会参加者に行いました。そして、「自分の人生を生きてください、他人の人生を生きないでください」と堀内氏は講演を結びました。堀内氏は、個人的な体験を交えながら、平成の日本の金融危機、リーマンショックにおける世界の経済混乱を振り返り、「読書」の意味について多くの名著を参照しつつ、ご講演くださいました。会場の皆さんは、多くの情報量と共に、大きなメッセージを受け取られたことでしょう。

佐藤 敦子 (経済学部准教授)

研究プロジェクト進捗報告

「日本における『持続可能な地域』実現の課題と展望ーガバナンスと域内経済循環の観点を中心に」と題する研究プロジェクトが始まったのは2021年度です。プロジェクト開始当初は、新型コロナの影響を受けて、運営には大変苦労しましたが、早くも今年度が研究プロジェクトの最終年度になります。

2023年度前期は公開講演会を2回、公開シンポジウムを1回実施しました。この場をお借りして、簡単に内容をご紹介します。

(1) 2023年6月30日(金) 公開講演会

第1回公開講演会は、6月30日(金)、本学図書館ホールにて、株式会社CUBIC STARS取締役会長で、元・財務副大臣/前・久留米市長の大久保勉氏を講師としてお招きし、「福岡久留米でのバイオ・エコシステム形成への取組み」をテーマに行われました。

福岡県は2011年から久留米市を拠点にバイオ産業の集積に向けた「福岡バイオバレープロジェクト」を進め、2021年7月、西日本で初めて、国の認定する「地域バイオコミュニティ」に選定

されました。講師の大久保氏は、大手金融機関、外国証券会社での勤務、参議院議員を経たのち、久留米市長として、バイオ・エコシステム形成の中心的役割を担われました。

講演会では、「1000社に3社」うまくいけば成功とされるベンチャービジネスについて、「千3つ」を「百3つ」「十3つ」にすべく、バイオビジネスの立ち上げと育成に向けて実践された久留米のエコシステム、バイオコミュニティの内容や仕組み、今後の展望、課題などについて語られました。自治体・起業家・金融機関・投資家など、関係者の熱い志と協力がやはり一番大切なようです。

講演会には、本学教職員のほか、本研究プロジェクトの学外メンバー、本学学生、一般市民、県内自治体職員、高崎経済大学附属高校教員、さらには久留米市東京事務所長なども参加し、質疑応答まで有意義な講演会となりました。

居酒屋「三幸」の懇親会では、大久保氏を囲み、プロジェクトメンバー、高崎市・藤岡市・群馬県・久留米市の現役職員、本学職員、公務員志望学生の交流が進み、「持続可能な地域」の実現に向けて、話が盛り上がりました。



<講演の様子 講師：大久保 勉 氏>

(2) 2023年7月19日(水) 公開講演会

第2回公開講演会は、7月19日(水)、本学図書館ホールにて、本学名誉教授で元学長の石川弘道先生をお招きし、「地方公立大学の持続的発

展に向けて」と題して行われました。

「持続可能な地域」を実現するには、当該地域にどのような紐帯が存在するかが決め手のひとつになります。研究・教育機関としての大学もそうした紐帯になりえます。本講演会では、1957年の創立以来、「全国型公立大学」として各地から学生を集め、4万人以上の卒業生を輩出してきた高崎経済大学で6年間、学長を務められた石川先生をお招きし、本学を事例にしながら、地方公立大学の持続可能性についてお話しいただきました。

日本における大学行政の流れや人口動態、進学率などにも言及しつつ、本学の立ち位置や諸課題について、非常に分かりやすく具体的に語っていただきましたが、現役教員からすると、大きな「宿題」をいただいたような気がします。持続的発展を望むなら、それだけの覚悟がいるというわけです。

懇親会は、石川先生の瑞宝中綬章の叙勲祝いを兼ねて、市内の「魚仲」で行われました。本学教職員のほか、理事会・同窓会関係者が集まり、お祝いするとともに、本学の現状と将来について、様々な意見交換がなされました。



<講演の様子 講師：石川 弘道 元学長>

(3) 2023年7月22日(土)

公開シンポジウム

公開シンポジウムは、本プロジェクト初の試みです。7月22日(土)、本学7号館72教室に

て、「プロバスケットボールチームとホームタウンの互恵的発展に向けて一群馬クレインサンダースの挑戦」と題する公開シンポジウムを行いました。フランチャイズ制を整え、地域密着で運営されてきたサッカーJリーグ発足から30年、そしてバスケットボールW杯開催の年に、こうしたテーマのシンポジウムを実施することに意義があるのではないかという趣旨です。

パネラーとしてお招きしたのは、株式会社TM Future 代表取締役・竹内美奈子氏と株式会社群馬プロバスケットボールコミッション代表取締役社長・阿久澤毅氏のお二人です。竹内氏は、日本バスケットボール協会理事、車いすバスケットボール連盟副会長も務めておられます(以前は、バスケットボールBリーグの理事も務められましたし、今は日本バドミントン協会の理事でもあります)。

阿久澤氏は、桐生高校野球部時代、「王貞治2世」と称されるスラッガーとして有名で、1978年春・夏の甲子園に出場されました(春の選抜はベスト4)。大学進学・卒業後、35年にわたる群馬県の高校教員・高校野球指導者を経て、2020年からバスケットボールの世界に転身されました。

シンポジウムでは、経験豊かなお二人に基調講演をしていただいたのち、日本における「持続可能な地域」の実現に向けて、プロバスケットボールチームとホームタウンがどのような取り組みを行えるのか、特に群馬クレインサンダースと太田市の関係を中心にシンポジウムを行いました。

2026年には新Bリーグが誕生します。そこで求められるのは、チームとしての実力もさることながら、運営会社の経営力やスタジアムの収容能力、自治体を含めた地域社会との協力関係です。シンポジウムには、本学教職員のほか、本研究プロジェクトの学外メンバー、本学学生、一般市民、高校教員、車いすバスケットボールチーム「群馬マジック」の関係者も来ていただきました。司会

の私がさばききれないほど数多くの質問票も出していたいただき、質疑応答まで有意義なシンポジウムでした。



＜シンポジウムの様子 講師：
写真中央；竹内 美奈子 氏
写真右；阿久澤 毅 氏＞

実は、竹内氏と阿久澤氏、そして私は同学年です。しかも、1978年夏のある日、この3人は、立場は違えど、同じ場所、甲子園球場にいたのです。阿久澤氏は、桐生高校の選手として、竹内氏と私は母校・膳所高校の応援団として。今回のシンポジウムのそもそもの発端は、45年前の夏の甲子園にあったというところも大きいかも知れませんが、私としてはそんな気持ちです。

群馬プロバスケットボールコミッションには、私のゼミの卒業生(24期生)がいます。高校時代、阿久澤氏の指導を受けたゼミ卒業生(15期生)が今は前橋市役所で働いています。研究プロジェクトメンバーには、ゼミ12期生(宮城大学准教授)と19期生(全国信用協同組合連合会)がいます。

竹内氏をBリーグ理事に招いたのは、あの川淵三郎氏(初代Jリーグチェアマン、元・日本サッカー協会キャプテン、元・Bリーグチェアマン)で、2017年、本学創立記念講演に川淵氏を招聘する際、仲介してくれたのが、現在NTT東日本に勤務するゼミ4期生です(父君が川淵氏と中学・高校の同級生ということで)。

シンポジウム後、古民家風居酒屋「待家(まちや)」の懇親会には、本学教職員、プロジェクトメンバーのほか、上記メンバー全員が集まりましたから、大いに盛り上がりました。人の縁は、いろいろなところにつながり、人の輪は、いろいろな形で広がっていくものだと、あらためて感じた1日でした(ちなみに、6月30日の講演会にお招きした大久保勉氏は、私の大学時代のゼミの先輩です)。



＜左：竹内 美奈子 氏、中央：阿久澤 毅 氏、
右：矢野 修一 教授＞



後期もまた、いくつかの公開講演会や研究会を企画しています。その成果も摂取しながら、来年の連休明けは、報告書の原稿を取りまとめます。日本における「持続可能な地域」の実現に向けて、少しでも貢献できるよう、関係各位の協力を賜りながら、プロジェクトリーダーとして尽力する所存です。

矢野 修一 (経済学部教授)

【 連 携 公 開 講 座 ア ン ケ ー ト 結 果 】

第8回連携公開講座アンケート調査結果報告(6/17)

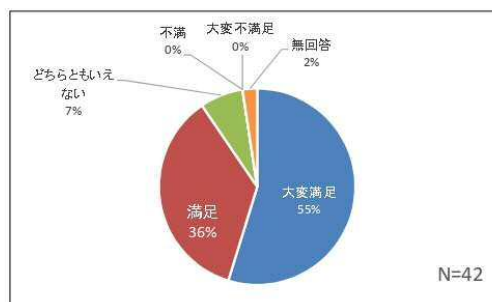
受講後、アンケート調査を実施した。
[有効回答数：42人（回収率：91.30%）]

出席人数 46人

問1. 満足度

【単位：人】

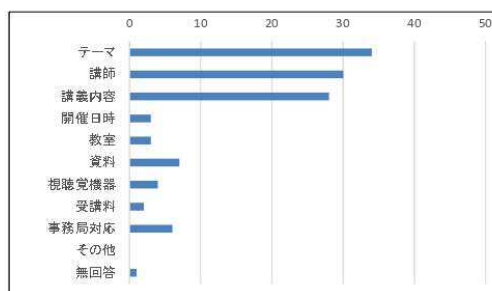
大変満足	23
満足	15
どちらともいえない	3
不満	0
大変不満足	0
無回答	1
合計	42



問2. 問1で「大変満足」「満足」と回答した方が評価する点（複数回答可）
や講師に向けての感想（自由記入）

【単位：人】

テーマ	34
講師	30
講義内容	28
開催日時	3
教室	3
資料	7
視聴覚機器	4
受講料	2
事務局対応	6
その他	0
無回答	1



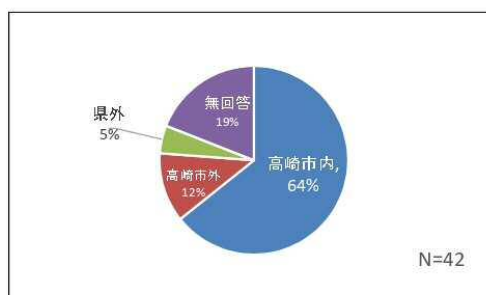
- ※ 年金のこと、環境のこと、年金と環境問題との関係、生態系のこと、大変勉強になりました。内容が盛り沢山でしたので、ぜひまた水口先生の講義で勉強させていただきたいと思いました。
- ※ 学長講義は大変分かりやすく良かったです。年金の問題、後期高齢者にも砕いて説明があって、自分もこれから何が出来るか考えてみましょう。
- ※ 参加できた回の中で一番良かった。環境課題をPRからアプローチする視点、閉塞感を突破する手法にしたい。
- ※ 講師の先生がよく勉強しているのがわかる。
- ※ さすが学長さんです。詳しい用語も多用されていましたが、公的年金の用途の現状と、将来に渡っての危機意識をもったお話。説得力がありました。
- ※ 学長様のお話がきけるなんて大満足です。スピード感のある話し方、内容も大変分かり易くとても良かったです。
- ※ テーマ、表題だけ見るとどんな内容になるのかと思いつながら参加しましたが、なるほどなと得心しました。
- ※ すごく有意義なお話で有益な講義ですが、テーマが大きすぎて一つ一つどう対処していいかわからない。危機感を感じて生きることが重要だと思う。
- ※ 環境問題の講座が少なく有意義でした。
- ※ 年金の投資先について考えたことがなかったのですが勉強になりました。環境問題も少し理解が進んだと思います。個人的には商品を購入する時に環境に配慮したものを選ぶようにしたいと思いました。
- ※ 年金と環境問題がどのように結びつくのか全く想像がつかなかったため、今日の講義は大変興味深く考えさせられました。ありがとうございました。
- ※ 年金から環境の話に移り、とてもわかりやすく身近に感じられ、これからの身近な問題として、避けては通れないと感じました。現実として毎日が平和で幸せだとなかなか・・・。企業も大切、環境も大切、今、自分にできる範囲でこれからも生活して行きます。
- ※ 身近に反省すべき事の多い事を実感いたしました。
- ※ 年金の活用に環境問題への対応、関係性が良く理解できました。ありがとうございました。

問3. 問1で「どちらともいえない」「不満」「大変不満」と回答した方が指摘される点
(自由記入)

※ 少し関心の無いテーマだったので、先生が一生懸命話してくれたがどうしても関心が持てなかった。ただし、昆虫食は関心があった。

問4. 通学・通勤・所属先の地域

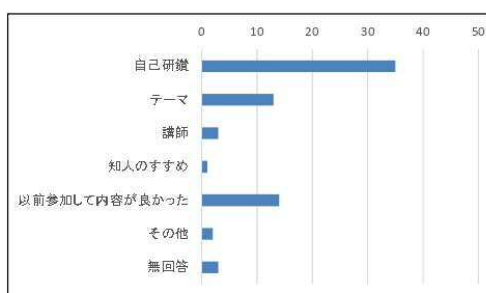
【単位:人】	
高崎市内	27
高崎市外	5
県外	2
無回答	8
合計	42



問5. 受講の理由 (複数回答可)

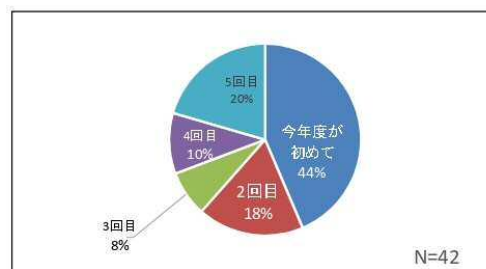
【単位:人】	
自己研鑽	35
テーマ	13
講師	3
知人のすすめ	1
以前参加して内容が良かった	14
その他	2
無回答	3

- ※その他
- ・ 時間があったので
 - ・ コロナ前のリレー講座に参加して、楽しく学べたので良かったから



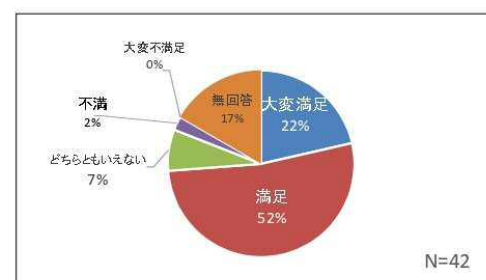
問6. 本講座 (中央公民館で行った) の受講回数

【単位:人】	
今年度が初めて	17
2回目	7
3回目	3
4回目	4
5回目	8
無回答	3
合計	42



問7. 今回講座の全体的な満足度

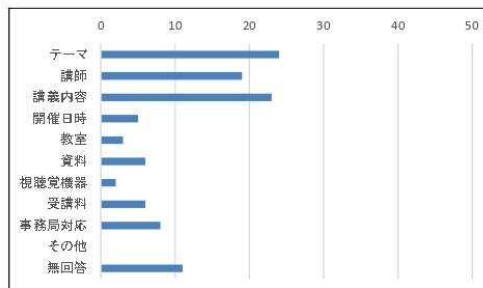
【単位:人】	
大変満足	9
満足	22
どちらともいえない	3
不満	1
大変不満	0
無回答	7
合計	42



問8. 問7で「大変満足」「満足」と回答した方が評価する点（複数回答可）

【単位:人】

テーマ	24
講師	19
講義内容	23
開催日時	5
教室	3
資料	6
視聴覚機器	2
受講料	6
事務局対応	8
その他	0
無回答	11



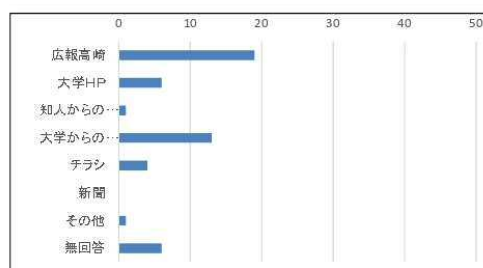
問9. 問7で「どちらともいえない」「不満」「大変不満」と回答した方が挙げた改善すべき点（複数回答可）

※ 前回参加して良かったのと、今回直々に大学から申込書が送られて、とても嬉しく、申し込みましたが、残念ながら前回よりもテーマにより、満足度の格差が激しいため、中間を取りこの結果になりました。
本日の学長のお話はとても分かり易く大変良かったです。

問10. 本講座をお知りになったきっかけ（複数回答可）

広報高崎	19
大学HP	6
知人からの情報	1
大学からの案内	13
チラシ	4
新聞	0
その他	1
無回答	6

※その他・・・かみつけの里の広告



地域科学研究所動静

・2023年度の地域科学研究所執行部は、所長・佐藤徹（地域政策学部教授）、副所長・永田瞬（経済学部教授）、総務企画委員長・米本清（地域政策学部教授）、編集委員長・若林隆久（地域政策学部准教授）、研究委員長・伊藤宣広（経済学部教授）によって構成されています。

・2023年10月現在、地域科学研究所の所員は60名、名誉研究員1名、特定研究員2名です。

編集後記

新型コロナウイルス感染症の位置づけが5類感染症へと移行し、制限が少しずつ緩和され、様々なイベントが従来の実施形式を取り戻し始めました。その中で地域科学研究所の講座・イベントへ多くの方にご参加いただき嬉しく思います。

対面形式での講座にオンラインでのノウハウを加え、より充実した講座・イベントを実施していきたいと考えております。2023年度後期も講座・イベントの開催を予定しておりますので、より多くの皆さまにご参加いただき、生涯を通じての学習にお役立ていただけますと幸いです。

(SI)

高崎経済大学地域科学研究所 ニュースレター No.21 発行 2023年11月15日 群馬県高崎市上並榎町 1300(〒370-0801) TEL(027)344-6267 FAX(027)343-7103 E-mail : chiikikagaku@tcue.ac.jp ©TIRS
--